



新藤兼人賞

SHINDO KANETO AWARDS



第 12 回新藤兼人賞

2007 年 12 月 7 日（金）東京會館 11 階 ゴールドルーム

主催：協同組合 日本映画製作者協会

特別協賛：富士フイルム株式会社／報映産業株式会社

協賛：松竹株式会社／東宝株式会社／東映株式会社／角川映画株式会社

コダック株式会社／株式会社ペイ・パー・ビュー・ジャパン／株式会社 I M A G I C A／株式会社ファンテック

SARVH 賞提供：一般社団法人 私的録画補償金管理協会

金 賞

中村義洋『アヒルと鴨のコインロッカー』監督・脚本



受賞者プロフィール 1970年茨城県生まれ。93年大学在学中に8mmで撮った短編『五月雨厨房』が、PFFで準グランプリを受賞。大学卒業後、崔洋一、伊丹十三、平山秀幸らの助監督として現場に参加。99年、自主制作映画『ローカルニュース』で劇場映画デビュー。その後、『仄暗い水の底から』（01年、中田秀夫監督）『恋に唄えば♪』（02年、金子修介監督）、崔洋一監督の『刑務所の中』（02）『クイール』（03）等の話題作の脚本を次々と手がける。映画『@ベイビーメール』（05）『あそこの席』（05）『ルート225』（06）。『チーム・バチスタの栄光』2008年公開予定

銀賞

佐藤祐市『キサラギ』監督



受賞者プロフィール 1962年東京都生まれ。TVドラマ「翔太の寿司」（96）「今夜、宇宙の片隅で」（98）「古畑任三郎」（99）「WATER BOYS 1」（03）、「僕の生きる道」（03）「WATER BOYS 2」（04）「アテンションプリーズ」（06）「大奥」（06）「花嫁とパパ」等数多くのヒットドラマを手掛ける。2005年「プレイ」で映画監督デビュー。映画「シムソンズ」（06）

SARVH

プロデューサー賞

梶井省志『それでもボクはやってない』 エグゼクティブプロデューサー



受賞者プロフィール

1956年10月24日愛媛県生まれ。上智大学卒業後、大映株式会社に入社。1993年、監督の磯村一路、周防正行、プロデューサーの小形雄二とともにアルタミラピクチャーズを設立。

「ファンシイダンス」(89)「あさってDANCE」(91)「シコふんじゃった。」(92)「Shall we ダンス？」(96)「卓球温泉」(98)「がんばっていきまっしょい」(98)「ウォーターボーイズ」(01)「解夏」(04)「スウィングガールズ」(04)「タカダワタル的」(04)「ザ・ゴールデン・カップス ワンモアタイム」(04)「不滅の男 エンケン対日本武道館」(05)「それでもボクはやってない」(07)「歌謡曲だよ、人生は」(07)

審査員講評

金賞・銀賞選考委員講評

審査委員長：李 鳳宇（シネカノン）

今年から新藤兼人賞選考の基準として新たに定めたひとつの定義に「作家のオリジナリティー」があります。原作小説やテレビドラマ、漫画原作が幅を利かせている昨今、監督としての資質を問う上で、最も有効な判断基準ではないかと思ったからです。そういった観点からは、今年の新藤兼人賞は該当する作品が極めて少ない「貧弱な年」だったようです。一方で「今後の監督活動に対する期待」という、前回までの基準を加味して審査を行いました。審査委員たちが選考の過程で最後まで話し合った映画は主に「アヒルと鴨のコインロッカー」、「キサラギ」、「腑抜けども、悲しみの愛を見せろ」、「長い散歩」でした。その上で正統派の映画監督への道を着実に歩んでいるという判

断から「アヒルと鴨のコインロッカー」の中村義洋監督が金賞に決まりました。そして次点だった「キサラギ」の佐藤祐市監督が銀賞に選ばれました。メジャー配給会社とテレビ局がタッグを組んだ大型映画だけが圧倒的な数字を残す現状で、それらの作品群からもオリジナリティー溢れる真の「監督」が育つ事を来年以降に期待します。

佐々木史朗（オフィス・シロウズ）

中村義洋君を意識したのは「人間の屑」を観たときに、脚本がおもしろかったからです。でも後で気がついたのですが、それよりずっと前にPFFで「五月雨厨房」を見ていたことを思い出しました。リアルで、なのに妙な浮遊感のある変わった魅力的な映画でした。最近は多くの才能が映画に参入してくれて、私たちとしてはとても嬉しいことなのですが、正統的に現場での苦労を積み上げる中から中村君のような人材が頭角を現してくれることは、日本映画にとって幸せなことです。それも崔洋一や平山秀幸、鄭義信など驚異的な腕力を発揮する監督や脚本家に囲まれてシナリオを共作したり、助監督として現場をともにしてきたわけですから、一見ふわりと見える中村君自身も実は相当ずぶとい作り手であることは確かで、今回の受賞を機に彼が飛躍することに期待し、大きな声で祝いたいと思います。

安田匡裕（エンジンネットワーク）

今年の選考の大きな基準としては、オリジナル作品を選ぶべきであるということがあった。オリジナル作品の中でこそ、新人監督の才能が光るからという理由であったように思うが、結果的には金賞の中村義洋監督「アヒルと鴨のコインロッカー」も銀賞の佐藤祐市監督「キサラギ」も原作ありきの映画であった。金賞の中村監督は敵討ちというありきたりのストーリーを時間軸に少し工夫を凝らし、見応えのある映画に仕立てた腕は大きな才能を感じさせた。この監督と仕事がしてみたいと、プロデューサーを動かす魅力にあふれていたように思う。銀賞の佐藤監督も演劇的な空間の利点を生かし、芝居に重点をおいた演出は中々のものであった。

三宅澄二（ミコット・エンド・バサラ）

中村監督、佐藤監督おめでとうございます。今年も沢山の日本映画が製作されましたが、ビジネスサイドからみた危機感は増しているように思います。その中今回は‘日本映画の新しい可能性’という視点で選考にあたりました。「アヒルと鴨のコインロッカー」の中村監督は、伊坂さん原作の中で映像化困難といわれていた作品を原作の世界観を損なわず、映画オリジナルの要素を入れヒット作に仕上げられました。「キサラギ」の佐藤監督は、登場人物たった5人のワンシチュエーション密出劇を見事なエンタテインメント作品に仕立てあげられました。両作品とも単館拡大という公開形態で、若いユーザー中心にヒットし、今後の日本映画の方向性を示してくれたのではないかと思います。お二人とも映画というフィールドで活躍されることと信じております。

奥田真平（オンリー・ハーツ）

残念ながら、昨年の『かもめ食堂』に匹敵する新鮮な作品には出会いませんでした。中で、第一に推した作品は、『アヒルと鴨のコインロッカー』です。原作を読んでいないので、脚本がどれくらい翻案されているかは不明ですが、脚本演出共に巧手だなと思いました。またキャスティングがいい。適材適所で見事でした。過度なマンガ的演出もなくキャストの持ち味を生かした自然な演出に好感をもてました。昨年の『ルート225』も秀作でしたが、今回ははるかに密度の高いものに仕上がっていると思います。監督はこれから日本映画のメインストリームの一角を担っていくのではないのでしょうか。次に、『キサラギ』と『腑抜けども、悲しみの愛を見せろ』が面白かったのですが、両者共に一言で言えばややテレビ的というか、映画が作る側と見る側の均衡した想像力で成り立っているとすれば、見る側の想像力をそれほど必要としないのではないかという印象を受けました。

SARVH プロデューサー賞選考委員講評

岡田 裕（アルゴ・ピクチャーズ）日本映画製作者協会 副理事長

昨年の日本映画の観客動員数が10年振りに洋画のそれを上回り、製作本数も五百本余り。インドに次ぐ世界有数の映画製作国で、日本映画は復活したと報じられました。然しその実態はお寒い限りで、五百本の日本映画の中、90%は興業的に採算がとれておらず、海外のマーケットで通用している作品も殆ど皆無、時代の文化としての映画の質から見ても明らかにテレビタレント中心のキャスト、テレビによる大量宣伝に支えられ全国三百～四百スクリーンで一斉に封切られるというビジネススキームが主流です。そのスキームから外れている映画企画は中々実現し難い。独立のプロデューサーが生きていくのに難しい時代です。そんな中で「それでもボクはやってない」は渋い素材をあくまでも正攻法で作り上げ、大量宣伝の娯楽映画と作品中心の短館映画のすき間に食い込んで興行的にも成功されました。周防監督への信頼度やフジテレビ、東宝の宣伝・興業力が成功の支えになっていると思いますが、一貫して周防作品をバックアップしてきたのは梶井氏ではないかと思いこの賞を贈る次第です。今回この賞の候補に上がったプロデューサーと作品を列挙します。阿部秀司『ALWAYS 続・三丁目の夕日』、大橋孝史『キャプテン』、天野真弓『14歳』、根岸洋之『天然コケッコー』、野間清恵・三宅澄二『キサラギ』、平形則安『陸にあがった軍艦』、山本又一郎『クローズZERO』、磯田修一『天使がくれたもの』。これ等の幅の広いプロデューサーと作品の傾向を見るにつけ、投票した審査員達の現在の日本映画界でのプロデューサーはどう有るべきかということへの悩みと混乱が見てとれます。最後にこのような状況下でプロデューサーを顕彰し賞金を出して下さる私的録画補償金管理協会に感謝します。